

はじめに

環境教育は今や誰もが唱え、その必要性を疑う人はまずいない。個人や種々の環境関係団体も関心を持ち、環境教育のための情報はネット上でも溢れ、環境教育学会の会員も増加の一途を辿っている。

環境教育は、自然保護や公害被害防止の必要性から必然的に始められたものである。それに加えて、今日では国内においても、そして世界的に見ても、地球温暖化対策に見られるように環境政策として進められ、必然的に“社会教育”として進められてきたともいえる。しかし、環境は優れて次世代の問題でもあり、それを担う子ども達にこそ“環境教育”が必要である。一方、学校教育の現場に目を向けると、環境教育は子どもの側から見れば環境学習である。学校教育の中ではその学科を設けず、従来の教科教育の中で折に触れ、また総合学習の一環として取り上げられてきている。環境教育は文部（科学）省の“環境教育資料”や“実践事例集”の配布以来、一部の学校や教師の間では徐々に取り組み始められていたが、学校間や教師間の関心度の差が大きかった。おそらく30代以上の教員は“環境学習”を経験することはほとんどなかったと見られる。

子どもにとっては、環境問題は折に触れて取り上げられるために、その知識は断片的となる。一方、学校の教師にとっては、基礎学力養成や生活指導に加えてさらなる負担となる。“環境問題に関心を持ち、それを理解し、環境のための行動をとれること”が環境教育のゴールとするなら、どのような環境教育が求められるか。

実践事例集を含め、著者の経験的な環境教育の書はいくつか発行されているが、環境学そのものが体系化されているといえないように、環境教育そのものも、環境教育の方法論も体系化されているとはいえない。文科省の“環境教育資料”などにおいて素材は提供されていても、教師がどのように進めたらよいかまでは示されない。ましてや、これから教壇に立つ学生のための教科書は皆無であるかに見える。そこで、そのような教師を目指す学生のために参考にな

ii はじめに

る本を編集することにした。この本はすでに教壇に立っている教師にも役立つものになるはずである。

本書は、環境・環境問題・環境教育の関係がわかること、環境問題全般に目配して素材が体系的に示されていること、生活や地域に結びついた専門的に見ても的確でわかりやすい独自の資料を取り込むこと、環境教育の進め方がわかることなどをコンセプトとして編集されたものである。

なお、本書の筆者は教育学のほか、生物学・地学・化学・工学など諸分野から環境と環境問題に関わる教育研究を行ってきた研究者と現場の教師である。ここで取り上げた事項には、例えば原子力エネルギーや洗剤など異なった見方のされる内容も含まれるので、学年によって伝え方は異なろうが、異なった見方のあることを伝えていただきたい。

2007年8月 著者を代表して 堀 雅宏